

1 2

知教連
(武豊町)

| | | | |
|------|-------|-----|-------|
| ○富貴小 | 牧野 誠也 | 武豊小 | 藤本 伊世 |
| 衣浦小 | 田中 里歩 | 緑丘小 | 西川 優希 |
| 武豊中 | 宇都 愛梨 | 富貴中 | 鈴木 桃子 |
| 武豊小 | 熊倉 秀一 | | |

分科会番号 1 3

分科会名 能力・発達・学習と評価

SDGsを自分事として捉えることのできる児童・生徒の育成 ～ESDを軸としたカリキュラムづくりを通して～

1 主題設定の理由

昨年度は、武豊町が2021年2月に掲げた政策である「ゼロカーボンシティ宣言」をテーマに、主体的に学ぶ児童生徒の育成を目指す取組を行った。研究の成果と課題は以下の通りである。

【成果】

- ・「ゼロカーボンシティ宣言」やその実現のための取組は、あらゆる教科で柔軟な単元設定が可能であることがわかった。
- ・施設見学、視聴覚教材、3Rカードゲーム、ろ過の実験、野菜作りなどにより、どの児童生徒にとっても参加しやすい授業を行うことができた。
- ・OPPシート（1枚ポートフォリオ評価）に学習の記録を残すことで、児童生徒の変容を見取ったり、次の学習につなげたりすることができた。

【課題】

- ・授業での学びが一過性のもので終わりがねないので、カリキュラムに汎用性・持続性・発展性をもたせるとよかった。
- ・概念的な知識を教え込む形になることが多く、自分たちで調べたり、考えたことを発表したりする機会があるとよかった。
- ・「脱炭素社会のために行動しよう」という目標が実態と離れている場面があったため、児童生徒の発達段階に合わせた目標設定をするとよいと感じた。

上記の研究結果を踏まえ、今年度は、社会的にも広く認知されてきたSDGs（持続可能な開発目標）をメインテーマに、自ら学ぶ意欲を高める取組を行うこととした。その際、ESD（将来にわたって、持続可能な社会を構築する担い手を育む教育）の考え方を中心に据えてカリキュラムを計画する。具体的には、児童生徒の願いを生かした学習や豊かな体験活動を通して、社会的な課題を解決するための取組について学習していく。その過程で、SDGsを自分事として捉えたり、必要な知識や考え方を育んだりすることができることを考えた（資料1）。

ちなみに、SDGsは、2015年9月の国連サミットで採択された、193の国連加盟国が2030年までの15年間で達成するために掲げた目標である。SDGs後の未来を生きる子どもたちに必要な資質とは何かを問いながら、持続性や発展性のある実践を目指すこととした。



【資料1：ESDと17目標との関係図】
(<https://www.kyoiku-shuppan.co.jp>)

2 研究の構想

(1) 目指す児童・生徒像

SDGsに関心をもち、自分事として捉えようとすることのできる児童生徒

(2) 研究の仮説

- 仮説1 地域や企業などの取組を教材化し、調べ学習や体験的な学びをしていくことで、SDGsへの関心を高め自分事として捉えられるようになるだろう。
- 仮説2 学習を振り返り、前向きな感想や次の学びへの願いをもつことができれば、持続可能な社会の担い手としての自覚を育むことにつながるだろう。

(3) 研究の手立て

- A (仮説1に対して)
- ・地域・企業・行政などのSDGsの取組に着目したカリキュラムづくり。
 - ・児童生徒の興味関心を引き出すことができるような学習方法や教具の工夫。
 - ・SDGsの取組の体験活動。
- B (仮説2に対して)
- ・児童生徒の意識の変容を捉えるための、振り返りシートやアンケートの活用。
 - ・児童生徒の能力や発達段階に合った適切な見取りと評価。

3 研究の実践と考察

(1) 実践1 小学5年生

- ① 教科 社会科 「さまざまな土地の暮らし」
- ② 単元のねらい

本単元では、沖縄県が、固有の自然や歴史、伝統、文化を守りながら、主産業である観光業をさらに発展させていくために推進しているSDGsの取組に着目する。SDGsが何を解決しようとし、私たちに何ができるのかを考えるための実践である。

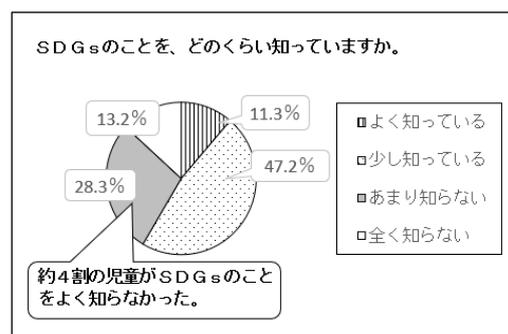
- ③ SDGsとの関連

SDGs 17の目標(ゴール)を学ぶために「SDGs すごろく (<https://go-goals.org/ja>)」を活用し、自分たちに何ができるのかについて考えさせる。そうすることで、児童の理解を促し、それぞれの目標を身近に感じながらSDGsに関心をもつことができるようにした。

- ④ 授業の様子

本学級では、昨年度、SDGsや3R(リデュース・リユース・リサイクル)について学習した児童がいたため、環境問題に関心のある児童が複数名いた。しかし、SDGsの認知度アンケートを取ると、児童の28.3%が「あまり知らない」、13.2%が「全く知らない」と回答し、約4割の児童にとっては知らない部分が多いことがわかった(資料2)。また、「SDGsの目標の中で、関心のあるものはどれですか」という問いには、ゴール3「すべての人に健康と福祉を」とゴール6「安全な水とトイレを世界中に」を選んだ児童が共に13.2%であり、他に比べてやや高い結果となった。

導入では、沖縄の暮らしを学んだ際に紹介したSDGsが、何を解決しようとしている目標なのか理解するために、それぞれの目標に関する簡単



【資料2：事前アンケート】



【資料3：SDGsクイズの様子】

なクイズを行った。クイズでは、SDGsがすべての人と地球のためによりよい世界をつくることを目指していることを学習した（資料3）。

その後、SDGsすごろくを使って学習した。児童たちは、SDGsの取組が、私たちの生活や地球環境にどのような影響を与えるのか、また、それぞれの目標が、どのような問題解決を目指しているのかについて考えていた。児童の中には、アフリカには学校に通っていない子どもが多いことを知り、「自分が毎日学校に行けていることは当たり前ではない」と反応する児童もいた（資料4）。

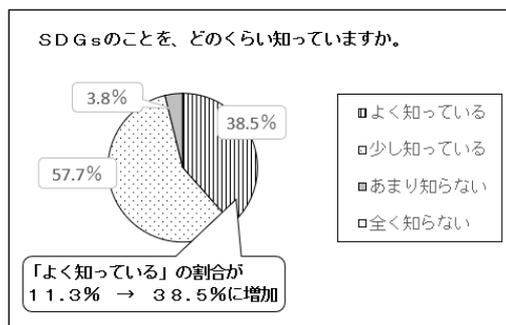


【資料4：SDGsすごろくの様子】

活動を終えて、振り返りシートを用いて自分たちに何ができるのかについて書かせた。記述の中には、「使っていない部屋の電気は消す」「お湯を沸かすときにガスの火を強くし過ぎない」「限りある資源を大切に使いしていきたい」「食品のロスを避けるため、給食でもしっかりと残さず食べていきたい」などの感想や意見があった。

⑤ 考察

この実践は、SDGsすごろくやクイズによりゲーム性を含ませることで、児童たちはSDGsの目標が自分の生活と関連していることを具体的に学習することができていた。また、実践後の認知度アンケートでも、「SDGsについてよく知っている」と回答する割合は大きく増加していた（資料5）。他にも、ゴール4「質の高い教育をすべての人に」に



【資料5：事後アンケート】

関して、アフリカの教育環境と自分たちの教育環境の違いを比べていたことから、児童が日常の当たり前に感謝し、よりよい社会を考えるきっかけとしていた。振り返りシートを使った自己評価の場面では、「SDGsを学んでから、水を大切に使うようになった」などと学びの成果を実感し、自分たちにできる具体的な行動を考えることができていた。

(2) 実践2 中学校特別支援学級

① 教科 自立活動 「廃材を再利用して新しいものを作ろう」

② 単元のねらい

靴下の製造過程で生じるハギレわっかについて、動画を視聴し、ハギレわっかでどのようなものを作製することができるか調べて学習する。調べたものの中で、興味のあるものを数点絞り、作製方法やそれを作るにあたってのポイントなど考えさせながら主体的に活動できるようにした。

③ SDGsとの関連

本実践は、SDGsのゴール12.5「廃棄物の発生を、予防、削減（リデュース）、再生利用（リサイクル）や再利用（リユース）により大幅に減らす」に関連している。靴下を製造する過程で出た廃材を利用して、どのようなものに再生利用できるか考え、実際に作製してみる。その後、廃棄物を減らす取組の中で、自分たちにもできることはないか普段の生活とリンクさせ、SDGsの取組を自分事として捉えて生活していこうとする気持ちを高められるようにした。

④ 授業の様子

実践前に、SDGsや3Rについてのアンケートを行った。「SDGsについて知っていますか」の問いに、「知っている」が35.7%、「少し知っている」が28.6%、「あまり知らない」が28.6%、「知らない」が7.1%と、約65%の生徒がSDGsを知っていた。また、「SDGsについてどのようなことを知っていますか」と質問すると、「地球温暖化」「男女差別」「飢餓」と答える一方で、ゴール12「つくる責任 つかう責任」については誰も答えなかった。さらに、「3Rについて知っていますか」の質問には、「知っている」が0%で、「あまり知らない」と「知らない」を合わせて71.4%と、学級の多くの生徒がゴール12に関わる取組について、普段から意識していないことがわかった。

SDGsやゴール12について授業で学ぶ中で、「リサイクルならしたことがある」と気付いた生徒はいたが、リデュースやリユースは知らない様子だった。ハギレわっかについて動画視聴した後、ハギレの実物を見せてみると「髪の毛をしばるゴムになる」「袋をとじることができるよ」という発言があった。調べ学習の中で、複数のハギレわっかを編み込むと、普段使えるものに生まれ変わらせることができると知り、一人一人が計画を立てた。実際の作業に入ると、編み方のポイントに気を付けながら作り上げることができた(資料6)。細かい作業の苦手な生徒もいたが、動画で何度も編み方を確認しながら完成させようと前向きに取り組んでいた。1つ完成すると、「他の物を使って何か自分たちで再利用できるものがあるかも」と発言する生徒もいた。授業後に、「ものを生まれ変わらせる活動をまたやってみたいですか」と聞くと、8割近くの生徒がやってみたいと答えた。また、「普段の生活で、自分ができるような3Rはありますか」の問いに「マイバックを持つ」「着なくなった服を雑巾にする」「まずはゴミの分別から心がける」と答えていた。生徒は、実生活で自分たちにできそうなことは何か考えることができ、中には「地域での集団回収で集められているものが、どのようなものに生まれ変わるのか気になる」と、地域での取組に自ら参加してみようと興味を広げる生徒もいた。



【資料6：作業する生徒の様子】

⑤ 考察

一人一人が興味関心のあるものを探し、調べながら学習することで、ハギレわっかの再利用に最後まで前向きに取り組めた。また、実際に自分たちで廃材の再利用・再活用を体験することで、ものを大切にしようと思ったり、他の廃棄物も普段の生活に生かせないかと考えたりする機会になった。これらのことから、実践を経て、SDGsの取組を自分たちのこととして考える姿を見取ることができた。

(3) 実践3 小学2年生

① 教科 生活科 「まちたんけんにいこう」

② 単元のねらい

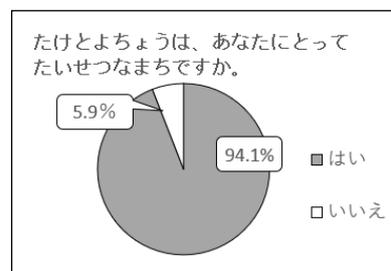
自分の町を探検し、調べる活動の中で町の特徴やよさ、そこに暮らしたり働いていたりする人々の様子に気付き、絵や文でまとめていく。そして、自分たちの町に対する親しみや愛着を育めるようにした。

③ SDG s との関連

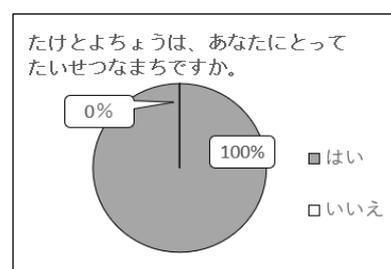
本実践は、SDG s のゴール 11 「住み続けられるまちづくりを」に関連している。町探検を行う際は、タブレットのカメラアプリを用いて記録し、学校に帰ってからは、地図アプリを活用して自分たちが歩いてきた道を写真で確かめる。これらにより、町探検が単に「楽しかった」で終わるのではなく、町の特徴やよさなどに気付き、具体的な振り返りができるようにした。

④ 授業の様子・考察

町探検を行う際にタブレット端末を用いたり、地図アプリを活用したりしたことで、町で見つけたものを具体的に地図にまとめることができた。また、町探検では通らなかった道や、行かなかった場所も地図に付け足している児童が数名いた。このことにより、児童たちは自分たちの住む町をもっと知りたいと思うことができていたと考えられる。また、事前アンケートでは、「たけとよちょうは、あなたにとってたいせつなまちですか」という問いに、94.1%の児童が「はい」と回答していたが（資料7）、事後アンケートでは、全員の児童（100%）が「はい」と答えた（資料8）。他にも、「たけとよちょうのよいところはどんなところですか」と聞くと、「自然が豊か」や「楽しい町」などの感想があった。これらの結果から、自分たちの住んでいる町に対して、町探検に行く前に比べて行った後は、興味や関心が高まり、知識を深めることができたと考える。



【資料7：事前アンケート】



【資料8：事後アンケート】

(4) 実践4 小学校特別支援学級

- ① 教科 学活 「災害から身を守ろう」
「地球温暖化について考えよう」

② 単元のねらい・SDG s との関連

本学級の児童は、緊急地震速報の仕組みについて調べたり、校舎内の避難経路を確認して真剣に避難訓練に参加したりして、自助の意識が育っていると感じる。そこで、自助だけではなく、安心・安全なまちづくり（公助・共助）についても関心をもたせていきたい。

本単元では、武豊町防災マップを活用し、自宅からの避難を想定した「避難地図作り（図上演習）」を行う。また、愛知県で実施している「ストップ温暖化教室（出前授業）」にも参加し、自然災害と気候変動、そしてSDG s の取組に関心をもたせ、必要な知識が身につけさせることをねらいとした。

③ 授業の様子

「災害から身を守ろう」の授業では、まず武豊町防災マップとハザードマップを見せた。すると、児童たちは海や河川の周りに浸水の危険性があることに気付いていた。また、町内には避難施設や防災倉庫などがあることも確認した。その後、模造紙大の白地図を用意し、水関連災害の危険地区に色を塗ったり、避難場所に印を付けたりした（資料9）。地図作りをしながら、「（一次避難場所の）〇〇小学校は本当に大丈夫なのか」



【資料9：地図作りをする児童の様子】

と、避難場所の安全性を気にしたり、被災後の生活について考えたりする児童がいた。

「地球温暖化について考えよう」の授業では、「ストップ温暖化教室」の出前授業に25名の児童が参加した。児童たちが一番興味をもっていたのが「絶滅危惧種」の話で、地球温暖化が生き物に与える影響について深く考えることができた。また、発電機を回す体験では、電気を作る際に多くのエネルギーを消費していることを、体感を通して学ぶことができた。

2つの実践を終えても、本学級の児童と、主体的なSDGsの体験活動を実施していくことには限りがあるように思われた。そこで、将来にわたって環境に配慮した行動の取れる人間性や、自然への愛着を育むことから始めようと考え、葉っぱジャンケンやフィールドビンゴなどの自然体験活動を新たに計画した(資料10)。どの児童も、校庭の生き物と触れ合うレクリエーションをとっても喜び、「物を探すのが楽しかった」などの感想を話していた。

| | 活動内容 |
|----------|--|
| 葉っぱジャンケン | 制限時間内に「一番大きい葉っぱ」を見つけて、ジャンケンポンで見せ合い比べる遊び(資料11)。 |
| フィールドビンゴ | ビンゴカードにある「ハートの形」や「においのする葉っぱ」「おへそのある木」など、9つのお題のものを校庭の自然の中で見つける遊び。 |
| ノーズ | 校庭で見つけた生き物を観察して、気付いたことや学んだことをもとにクイズを作る遊び。 |



【資料10：実施した自然体験活動(ネイチャーゲーム)】

【資料11：葉っぱジャンケンの様子】

④ 考察

地域の防災マップを活用した避難地図作りや、環境破壊・気候変動を体験的に学ぶ授業を計画し、実施したことで、どの児童も意欲的に参加することができていた。ストップ温暖化教室の授業を受けている途中、「地球温暖化って、何だろう」とつぶやいていた児童も、授業の終末に配布されたテキストを真剣に読んだり、家庭でできる取組を考えたりしていた。

また、自然体験活動では、生き物の多くの特徴に気付いたり、見つけたものを友達と図鑑で調べたりしていた。他にも、ノーズという生き物(昆虫)のクイズを考えて、他学年のペアの友達に出題して楽しむ姿もあった。これらの様子から、この実践で、地球規模の課題やそれらを解決するためのSDGsの取組、そして身近な自然環境への関心を高めることができたと考える。

4 研究の成果と課題

本研究では、全ての実践で体験的な学びを展開したことで、実践1の振り返りシート(「使っていない部屋の電気は消す」「お湯を沸かすときにガスの火を強くし過ぎない」「限りある資源を大切に使いしていきたい」「食品のロスを避けるため、給食でもしっかりと残さず食べていきたい」)や実践2の振り返りシート(「地域での集団回収で集められているものが、どのようなものに生まれ変わるのか気になる」)のようにSDGsへの関心を高め自分事として捉えられるような児童生徒の育成につながった。一方で、次の学びへの願いや今後の展望などを、具体的に児童生徒自身が考えることはあまりできなかった。

今後の課題として次の学びへの願いや今後の展望などを、具体的かつ継続的に児童生徒自身に考えさせていくことが上げられる。本研究の成果を土台にして量的なデータからの現状把握やSDGsの意義などの本質理解、教科における知識も深めていけるような活動を取り入れることで、児童生徒の思いや疑問をより具体的に考えさせられると思われる。